



都市の政治学 --ウガンダ、カンパラにおける国家と 家族の民族誌

森口, 岳

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-09-10

(Date of Publication)

2027-09-10

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3453号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498289>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文要旨

氏 名 森 口 岳

論文題目 都市の政治学—ウガンダ、カンパラにおける国家と家族の民族誌

論文要旨 本博士論文は、三部構成（全 11 章）となっており、第Ⅰ部「都市の政治学」、第Ⅱ部「市民の政治学」、第Ⅲ部「家族の政治学」というタイトルがつけられている。各部は 3 章ずつで構成され、序章と終章を加えた 11 章により成り立っている。それぞれ、ウガンダ・カンパラにおける都市性、市民性（シティズンシップ）、そしてスラムに住むコンゴ移民の家族を事例として分析を行った。

序章 「「都市の政治学」解題」においては、本論文の目的、および方法論の背景となる理論的関心について論じた。見田による「二重の剥奪」の議論を手掛かりにしつつ、都市空間における〈都市的なもの〉による「二重の疎外」の概念を本論文の背骨となる議論として提示した。

第Ⅰ部「都市の政治学」では、都市空間における「政治」に焦点を当てる。ここでの「政治」とは、フランスの社会学者ルフェーヴルが指摘するように、時代背景を持った社会的生産物としての空間が生み出す複合的な政治性を指す。この政治性は、国家の歴史、政治的介入、人々の社会関係によって相互に作用しながら形成されるものであり、民族誌的な描写（7つのデッサンと1つのスケッチ）とともに論じた。

第1章「都市空間の民族誌」、第2章「都市と国家の民族誌」では、カンパラの都市空間について、思想的・物質的な視点からの先行研究を整理し、それに付随するかたちで7つの「民族誌的デッサン」として描写した。都市の部分から全体を眺める際に、表象、植民地的階層、地理、近代性とローカル・エスノスケープ、スラムと移民などのそれぞれの視点によりなる「風景」をそれぞれに示した。

第3章「都市の政治学」では、筆者が調査を行った 2007 年～2011 年の間に発生した 3 つの暴動を取り上げ、都市における政治的デモや暴動について考察した。その上で国家の政治がどのように「都市の政治」と重なりうるのかについて論じた。

第Ⅱ部「市民の政治学」では、ウガンダにおける伝統的な政治組織である「王国」と、近代的な「共和国」との対比を通じて、市民の政治主体性について論じた。

第4章「臣民か、市民か」では、アフリカにおける「民族」や地域共同体を取り上げ、政治学者マムダニの「分枝国家」論が持つ可能性と限

界について指摘した。

第5章「王国と共和国」では、カンパラにおけるブガンダ王国と1986年以降のNRM（ムセヴェニ政権）を比較し、現実の政治が市民共同体の形成にどのような影響を与えているのかを分析した。植民地以前の諸王国の政治形態の変化から、現在の政権による統治に至るまでのウガンダ史もまた概観したものである。

第6章「部族・氏族・家族」では、ウガンダにおいて王国の枠を超えて存続する「民族（部族・氏族）」の政治的な役割を考察し、都市における社会的保障としての機能や、市民性の形成との関係について論じた。なお本章の民族誌的記述を通じ、都市民と国家をつなぐ人々の政治的・社会的行為のあり方を明らかにしている。

第Ⅲ部「家族の政治学」では、第Ⅰ部、第Ⅱ部で扱った都市空間やポストコロニアルな政治空間から排除された人々の経験に注目する。特に、スラムに住む移民の家族や個人の選択に焦点を当てている。

第7章「見えない都市と見えない市民たち」では、都市空間から排除されたスラム移民の状況を分析した。パールマンやルイス、シェパー＝ヒューズ、ビールなどの南米の都市民族誌の先行研究の整理を行い、その上でウガンダ、カンパラのスラムの特異性を示した。そしてカンパラの事例においては、都市の開発が進むにつれ、スラムという「異質な農村空間」は排除され、個人が共同体から切り離されるプロセス（「モナド化」）が進んでいることを指摘した。第8章「女たちは踊ることができるか？」では、そのようなモナド化された個／個人の中でも、特に新自由主義の暴力にさらされ、シティズンシップの庇護を求める「バーガー（クラブにたむろする女性）」に注目した。彼女たちは、家族や氏族の枠組みから抜け出し、都市空間の中で自由を求める上で、自らのセクシュアリティを利用する。だが、社会的経済的安定を得るために、最終的には「家族-氏族」を基盤とする「家族的な市民性」へと回帰する傾向があることもまた指摘した。第9章「家族の政治学」では、スラムの住民たちの家族のライフ・ヒストリーを追い、彼らが二重の疎外の中で「秘密」や「嘘」を抱えながら生きている様子を描いた。こうした葛藤は、調査者にさえ語られることなく、家族内に閉じ込められていく。そして、その心理的な葛藤が貧困の再生産につながるような、「家族」の解体を導いていくことを、民族誌的記述を通して示唆した。

終章「都市・市民・家族」、そして間の場所」では、都市空間と二重の疎外性を再考し、アフリカの都市空間と近代性が今後どこへ向かうのかを探った。またエピローグ的に、本書の主要な事例であるナムウォンゴ・スラム、カンバスとその家族の現在について述べている。(2042字)

論文審査の結果の要旨

氏 名	森口 岳			
論 文 題 目	都市の政治学—ウガンダ、カンパラにおける国家と家族の民族誌			
判 定	合 格 ・ 不 合 格			
論文チェックソフトによる確認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：			
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名	論文審査結果について
	委 員 長	教授	梅屋 潔	☒ 確認
	委 員	教授	齋藤 剛	☒ 確認
	委 員	東洋大学社会学部・教授	波佐間 逸博	☒ 確認
要 旨				
本研究は、ウガンダの首都カンパラに生きる人々を対象とし、彼らが生きる都市空間、社会をめぐる政治的想像力、そして「疎外」や貧困などを経験しているミクロなレベルでの人々の生のあり方を、政治という観点から追求した民族誌的研究である。序章で都市空間に関する理論的研究をレビューしたあと、第Ⅰ部第1章から第Ⅱ部5章まではカンパラという都市的空間を理解するための歴史・政治状況を、経済資本の流入、都市、国家、王国レベルの政治的対立（空間、暴動、民族、市民など）を通じて都市的空間の成立を論じているほか、またその過程で生成されてきた多層的なシティズンシップについて特に第Ⅱ部4章、5章において論じている。第Ⅱ部6章から第Ⅲ部7章～9章では、ナムウォンゴにおける申請者の長期フィールド経験に基づく民族誌的記述によって構成されている。 本書の評価されるべき点として、第一に、多年にわたる申請者の研究成果をもとにした本研究が、ウガンダやアフリカ、あるいは人類学に限定されない幅広い学術的関心に基づく独自の理論的視座の確立と、現地調査に基づく詳細かつ厚みのある実証的データの提示に基づいた学術的貢献をもたらす内容となっていることが挙げられる。（申請者の注意深い現地調査の様子については、本文における論述のみならず丁寧に記述された脚注の内容からも窺える。）				

理論をめぐっては、既存の都市人類学の問題点を踏まえ、申請者の多岐にわたる学術的・理論的関心を背景として、都市という空間の捉え方、都市に生きる個人と社会の関係、都市に生きる家族という観点から方法論を再検討に付し、独自の視点に基づく議論の展開が試みられている。

第二に、都市的空間の成立をめぐる多角的な議論と合わせてそこに生きる都市民に焦点を当てて、国家と民族の狭間にある多層的なシティズンシップの具体的な様相を明らかにしていることも評価されるべき点として挙げられる。

評価されるべき第三点としては、第Ⅲ部 8 章の性をめぐる女性たちの主体性に関する民族誌と 9 章のナムウォンゴのキャンバス家族の生活史が挙げられ得る。マラヤ（娼婦）や、スラムで暮らす一家族の生活史は、部外者が立ち入ることが困難な研究テーマだが、（学費の捻出やバー通いなどを通じて）かれら一人一人の生に寄り添い、マラヤや、彼女たちをめぐる都市住民の性をめぐる語り、またナムウォンゴに暮らすキャンバス一家の生活史に関する細部にわたる語りを丁寧に聞き書きすることで、重厚感のある民族誌が提示されている。

他方で、既存の先行研究や新聞資料、申請者が長年の調査で集めてきた国家や都市をめぐる都市住民の語りによって構成されているⅠ部とⅡ部は、Ⅲ部と比べて記述が散漫である。ウガンダの国家レベルの政治史（ムセヴェニ政権成立背景や近代国家内部の国家ガンダ王国など）や都市暴動の論述と、申請者が注目してきたナムウォンゴの形成をめぐる記述との間には、Ⅰ部から読み始めた評者からすると、記述に乖離があるように思える。9 章まで読み進めてようやくⅡ部 6 章以降の民族誌的記述と、Ⅰ部とⅡ部 5 章までの国家レベルの政治史やガンダ王国、都市暴動などを論じた記述が関連していたことに気が付く。だが、最初から読んだ場合、Ⅰ部とⅡ部がどんな位置づけなのかが見えてこず、本研究の問いが何であったのかを見失ってしまう可能性がある。したがって本研究は、章構成を大きく入れ替えて、ナムウォンゴのキャンバス一家の話から始め、マラヤの女性、カンパラのスラム、都市のシティズンシップ、ガンダ王国、国家といったように「小さな物語」から「大きな物語」へとスケールアップしていった方が、理解しやすかったように思われる。あるいはスラムの民族誌を記述の主軸に据えつつ、都市、国家レベルの記述を適宜挿入する論述スタイルもあり得た。そのようにすることで、Ⅰ部とⅡ部の重要性がより読者に明示的に提示される。

上述のように検討すべき点はあるものの、それらは申請者本人が自覚するものであるため、今後の研究により改善されるはずのものであると審査員一同意見が一致した。

本研究はウガンダ・カンパラの都市を対象として都市政治や国家政治、人の移動と結びつきかななどを研究したものであり論文の核となる民族誌的記述の厚さと体験に根差した一次資料の貴重な報告にもとづいて、都市における生活について重要な知見を得たものとして価値ある集積である。よって、学位申請者の森口岳氏は、博士（学術）の学位を得る資格があり、本研究は論文博士に相当するものと認めるものである。